

戦中、戦後の 義塾をめぐって

2015年は、アジア・太平洋戦争の終戦から70年の節目の年だった。徴兵の学生への猶予がなくなり、1943年から終戦まで、慶應義塾は約3500名もの塾生を学徒出陣で送り出した。一方で、義塾は最大の空襲被害を受けた大学であり、その戦火の爪痕は、戦後の復興の大きな足かせとなった。義塾の戦中、戦後を振り返り、戦争に巻き込まれた日々を記憶にとどめたい。

学徒出陣と義塾の戦没者

戦前の日本には男子に兵役義務を課す徴兵制があり、満20歳で徴兵検査を受けることが定められていたが、1927（昭和2）年の「兵役法」では、学生には徴兵延期の特例があり、20歳になっても学業の継続が認められていた。

しかしアメリカとの戦争が始まった1941年には、卒業を早める繰り上げ卒業や徴兵猶予期間の短縮が始まり、戦局が不利に傾いていった1943年10月2日に公布された勅令により、満20歳に達している文科系の学生の徴兵猶予停止が決まり、徴兵検査を受けた後、12月初旬には学業半ばで陸海軍に入隊することになった。ただし、理科系の学生は「国家の必要」とし



大講堂前での塾生出陣壮行会の様子。大講堂も戦災で焼失し、現在は同じ場所に西校舎が建っている



軍事教練で日吉キャンパス第一校舎前を行進する予科生

て、23歳まで入管を延期された。義塾では、医学部、理工学部
の前身である藤原工業大学が理科系にあたる。

文部省は10月21日に、雨中の明治神宮外苑競技場において東
京周辺の出陣学徒を集めて「出陣学徒壮行会」を挙行したが、
義塾でも11月23日に三田山上で塾生出陣壮行会が行われ、約
3000名の出陣塾生が参加した。出陣塾生は出陣壮行歌、応
援歌を合唱後、福澤諭吉の墓参に向かった。

翌1944年、さらに45年4月入隊の塾生を含めて、出陣学
徒数は約3500名と推測されている。現在までにわかっている
範囲で、在学生のおよそ385名が戦没している。また出陣
学徒以外の卒業生・教職員なども含めた義塾関係者全体の戦没
者は、確認されているだけで2220名を超える。2014年
10月に、最新の情報に基づき補正を加えた慶應義塾関係の戦没
者名簿が、三田キャンパス・塾監局前の庭園にある「還らざる
学友の碑」に納められた。

語り継がれる「最後の早慶戦」

1943年10月16日、「出陣学徒壮行早慶戦」が早大戸塚球
場で行われた。既に東京六大学野球連盟は解散し、公式戦は行
われていなかった。計画したのは阪井盛一主将、片桐潤三マネ
ージャーら野球部員だった。平井新野球部長を説得し、小泉信
三塾長の賛同を得て、早大野球部に試合を申し込んだ。戦争が
激しくなるなか、早大側には慎重論もあったものの、野球部員
たちの熱意が実り、開催にこぎ着けた。

試合は早大の勝利で終わったが、試合後に球場全体で沸き起
こった「海行かば」の大合唱が、戦地に赴くことになった義塾
と早大の出陣学徒へのエールとなって響き渡った。



出陣学徒壮行早慶戦



還らざる学友の碑。志半ばで学業に戻ることができなかった学友をしのび、1998年に設置された。当時の鳥居泰彦塾長による碑文「還らざる友よ／君の志は われらが胸に生き／君の足音は われらが学び舎に 響き続けている」が刻まれている



三田キャンパスを後にする出陣塾生



空襲を受けた図書館旧館



三田キャンパスの罹災状況



信濃町キャンパスの罹災状況

戦災によるキャンパスの被災と復興

今も残る日吉地下壕

日吉キャンパスの一角に、戦争の名残と言わなければならない地下壕がある。ここには海軍の連合艦隊司令部が置かれていた。本来、連合艦隊の司令部は戦艦「武蔵」や「大和」など洋上の旗艦内に置かれていたが、司令部を置くに足る艦船の多くが失われ、陸上に移さざるを得なくなった。そこで移転先選ばれたのが、高台で無線通信環境がよく、学徒出陣で塾生が減り、校舎が空いていた日吉キャンパスだった。

1944（昭和19）年3月、文部省の指示で第一校舎、寄宿舎などを海軍に貸す契約が結ばれ、9月には連合艦隊司令部が日吉に移り、空襲に備えてまむし谷から寄宿舎付近にかけて地下壕が掘られた。今の地下壕は、幅2.5mほどの通路が延々と続くトンネルだが、かつては司令長官室、作戦室、電信室などがあり、空襲時には地上にいる司令長官や幕僚もここに入って、作戦の立案、指揮がされた。特攻機は突入時にモールス信号を出

し、地下壕の電信室で受信するその信号が途切れたときが特攻隊員の最期を意味した。現在、地下壕は原則非公開となっており、立ち入りはできないが、教養研究センター実験授業「日吉学」等で学生の見学が実施されている。

キャンパスには甚大な空襲被害

戦争末期の1945年、米軍による本土空襲は激しさを増し、4月には日吉キャンパスの工学部校舎の8割が焼失、5月には医学部のある四谷（現在の信濃町）キャンパスと三田キャンパスでも施設の半分以上が失われた。義塾は最も空襲の被害を受けた大学だった。

医学部は5月24日未明の空襲で木造校舎の大部分と病院を失ったものの、入院患者には一人の負傷者もなかった。

三田キャンパスでは、5月24～25日、26日の2回にわたる空襲で木造校舎のほとんどが焼失、焼け残ったのは塾監局、学部校舎（現在の第1校舎）、鉄筋校舎（現在の研究室棟の位置にあった）、三田演説館だけだった。学徒出陣壮行会が行わ



三田山上に昭和天皇を迎えての創立90年式典



米軍に接收された日吉キャンパス（左：建物は現在の高等学校、右：カマボコ兵舎と呼ばれ、返還後も仮校舎として使用された）



日吉記念館での創立100年式典



日吉返還式と返還の鍵



連合艦隊司令部地下壕・作戦室

れた大講堂は鉄骨と崩れた赤レンガを残すのみになった。

米軍に半分接收された日吉

大きな空襲被害を受けたとはいえ、広い敷地を持つ日吉キャンパスの残存施設は、義塾全体の5割を占めた。しかし、終戦間もない1945年9月に敷地と施設の約半分が米軍に接收され、通信部隊と騎兵師団の宿舎や、独身将校の宿舎などに利用されていた。

日吉は戦後の義塾復興に重要な役割を果たす施設であり、直ちに返還交渉が開かれた。当時の渉外室や、藤山愛一郎を会長とする塾員有志による三田リエーゼンクラブなどによる義塾一丸となった返還交渉の末、ようやく1949年に返還が決まり、10月1日の返還式ではシンボルとして金色木製の「返還の鍵」が潮田江次塾長に手渡された。

契機となった創立90年式典

1947年5月24日晴天、空襲の惨禍の痕が残る三田山上において、昭和天皇を迎えての創立90年記念式典が挙行された。その趣意書には「百年祭を目指して

今後十年に慶應義塾を昔にまさる盛んな学園に建て直そうと、広く天下に呼びかける」と、創立100年を見据えての戦後復興の決意が語られている。時を同じくして、荒廃していた三田演説館の修復が行われ、続いて焼夷弾落下で屋根が抜け落ち、内部が炎上した図書館旧館の修復工事も始まり、1949年5月5日に落成式が祝われた。ただし、戦災でステンドグラスが失われた大窓には透明なガラスが入れられていた。当初の制作者、小川三知の弟子である大竹龍蔵によりステンドグラスが復活したのは、四半世紀の時を経た1974年である。

1955年にスタートした、創立100年記念事業に伴う募金は、12億円の目標が途中で15億円に引き上げられたにもかかわらず、それを上回る15億3000万円余が集まった。そして1958年11月8日、新築なった日吉記念館に昭和天皇はじめ内外の招待客4000名を迎えて、創立100年記念式典が行われた。三田、四谷、日吉各キャンパスで行われていた記念建設事業は、1962年に三田西校舎の第2期工事によって完了し、戦災復興の大事業は完成した。

※P2くまでの写真は、福澤研究センター所蔵（ただし連合艦隊司令部地下壕を除く）

修善寺、そして青森へ。

幼稚舎生の集団疎開

東京への空襲が激しさを増した1944（昭和19）年3月、幼稚舎は復学を約束し、政府の方針に従って縁故疎開を奨励した。6月には「帝都学童集団疎開実施要領」が発表され、縁故疎開者以外の3年生以上の幼稚舎生約350名が伊豆の修善寺に疎開した。翌45年4月には、卒業した6年生と入れ替わる形で新たに入学した1年生を含め、3年生までの約50名が疎開に合流した。

旅館3館に分宿する修善寺では、6時に起床して日枝神社までかけ足、7時に朝食をとり修善寺境内で朝礼とラジオ体操。午前中は旅館の大広間で勉

強、昼食後は片道2kmの山道を歩き、下狩野国民学校の空き教室で授業が行われた。4時半に旅館に戻り入浴、5時半から夕食、6時半から自由時間で8時には床につく。温泉地だけに入浴には困らなかつたものの、食事は量も質も極めて貧しいもので、疎開の責任者だった吉田小五郎教諭らは、食糧確保に苦労した。

そして1945年5月には、伊豆も危険であるとして青森県西津軽郡木造町への再疎開が決まった。青森行きを希望した1〜6年生約140名が二昼夜をかけて列車で移動し、この地で終戦を迎えた。幸いなことに、疎開

中の犠牲者はゼロだった。

交通事情の悪いなか、集団疎開児童が天現寺校舎に戻ったのは10月20日。彼らにとって、約一年半に及んだ疎開生活の数少ない楽しみのひとつが、週に一度の家庭とのはがきのやり取りだった。ここに紹介するのは、大切に保存されていたその一部。意外に明るく疎開生活を報告する幼稚舎生のはがき、子どもを楽しませるために生き生きとした絵を描いた家庭からのはがき、どちらにも戦時下で別れ別れになった家族への思いが込められている。



①～⑤、⑦ 家族などから幼稚舎生へのはがき
⑥ 幼稚舎生から家族へのはがき

「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクト

福澤研究センターでは、都倉武之准教授を中心に、大学院生と学部生の有志が協力してこのプロジェクトに取り組んでいる。2人の塾生に話を聞いた。

聞き取り調査で知った戦争の悲惨

長野県に住む上原良司さんのご遺族を十数回にわたって訪ね、インタビューや資料の収集と整理を今も続けています。良司さんは、学生の徴兵猶予停止により経済学部在学中に学徒出陣し、特攻隊員として満22歳で戦死されました。「所感」と題された遺書が、戦没学生の手記を集めた『きけわたつみ



上原家での調査

のこえ』に掲載されています。また、義塾の医学部を卒業し軍医となった上原家の長男・良春さんと次男・龍男さんも戦死されたことを知り、衝撃を受けました。3人の戦死により残された家族の人生も大きく変わったのです。プロジェクト全体としては全国100人以上の方にインタビューをしています。90歳を超えた方々から戦争での辛い経験を聞きながらも、70年前に20歳そこで戦死した人たちの、断ち切られた若い命を残念に思わずにはいられません。塾員の遺品などの調査をした際、あ

た。しかし同時に、ただ残酷なものと思っていた戦争について、いろいろな感じ方や考え方があることを知ったのは新しい発見でした。

というのは、海軍の同期生との絆や、何事も5分前に準備を整える海軍伝統の「5分前行動」精神を今も大切にしており、海軍での経験があったからこそ人格形成ができたと明るく語った塾員にお会いしたからです。



展示準備の様子

る遺書に「ママ、パパ」と書かれていたのを見て特攻隊員にも家庭での日々の生活があったのだと強く感じました。世界では今も多くの戦争が起きています。日本でも、学生が否応なく戦争に巻き込まれる歴史があったことを知り記憶すること、そしてその事実冷静に向き合うことは、若い私たちにとって重要だと思います。



法学研究科
後期博士課程
横山 寛 君
よこやま ひろし

人々は戦争に、どう向き合ったか

幼い頃から、新聞記者だった祖父に、家族を失う悲しさや食糧難の辛さなど、戦争の時代のさまざまな話を聞いていたことをきっかけに、1年生の夏からプロジェクトに参加しました。

多くの方にお話を聞き、また塾員、塾生の日記や手紙の遺品整理などの活動を通じて、否応なく戦場に送られて辛い経験をした学生や命を落とした学生がいたことを、きちんと覚えていなくてはならないと強く思います



法学部政治学科3年
成田沙季 君
なりた さき

また、寄贈された当時の塾生のアルバムには、学生生活のさまざまな場面の楽しそうな写真がたくさん貼られています。クラスの一人ひとりの写真のそばに興味や部活に関するユーモラスなイラストが添えられているものもあり、丁寧にアルバムをつくることで、戦争という現実から自分たちの日常生活を守ろうとしていたのかな、と感じました。